

片仮名古活字三卷本『宝物集』独自本文のゆくえ

——「片仮名古活字三卷本」から「第二種七卷本」への増広手法にそって——

大 場 朗

一 はじめに

「片仮名古活字三卷本」（以下「片活三本」と略す）巻四と「第一種七卷本」（以下「元禄本」と称す）巻三の十二門開示直前に不可解な偈・経文の記述がある。これは、他の『宝物集』諸本にみられない二本のみの本文となっている。内容は『往生要集』から引用した「華嚴經」の偈二種と「宝楼閣經（實際は「宝積經」）の一種の計三種の偈と経文からなっている。一見すると、前後の語りを補強する『宝物集』の手法である經典引用のようにも解される。ところが、この偈・経文は前後の本文との積極的な脈絡も認められず、作者の意図するところがつかめないものとなっている。そこで小稿では、この偈と経文の三種が何故記されたか、それらの偈と経文が「片活三本」と「元禄本」の内容とどのような関わりがあるか、さらには他の主要伝本との関連からどのようなことが明らかになるか、などについて考証してみたい。さらに、もう一例、「片活三本」「元禄本」の両伝本にみられ他伝本にみられない独自歌のゆくえをも考察に加え、これら二例の結果を踏まえて、「片活三本」が草稿本的性格を有する伝本であることを指摘してみたい。

二 問題の所在

問題の所在を指摘する前に、「片活三本」と「元禄本」の関係について一言して置かなければならないことがある。それは、「元禄本」が「片活三本」「平活三本」「第二種七卷本」の混態本で、古鈔本七卷本の成立以後はるか時代が下つたところに成立した伝本であるという点である。これについてはすでに木下資一氏、大島薫氏、山田昭全氏の詳細な考察が報告されており、^①実証的で説得力に富むことから、異論も報告されずほば首肯された感がある。したがって、先述した二用例は「片活三本」の独自本文で、「元禄本」の該当箇所は「片活三本」からの引用ということになる。その点を踏まえた上で、「片活三本」の問題とする前者の箇所を『静嘉堂文庫蔵 片仮名古活字三卷本宝物集〔影印〕』から一丁分引用して確認しておきたい。

医家ニハ十二経脈ヲ治シ陰陽ニハ十二式神ヲツカフ天

文ニハ分野ヲ見暦道ニハ直ヲ記ス算道ニハ十二空ヲ算

二挙明法ニハ十二貞觀格ヲ引宿曜ニハ十二運ヲ勘へ

相ニハ十二ノ身相ヲ見ル管絃ニハ十二律ヲ知り詠曲

ニハ十二山寺ヲ謳フ蓬萊宮ノ上ニハ十二樓ヲ作り会

昌門ノ内ニハ十二堂ヲ立タリ故ニ往生スル道ヲモ十二

ヲ注シ申也十二ノ中ニテモ各其心ノ引ン方ヲ勤給ヘキ

也世ノ中モ人ノ心モ区ナレハ或ハカミヲソリ捨ル人モアリ

カマヘテ長クヲホサントスル人モアリ又カミヲ空ヘカキアクル

人モアリ下ヘ撫下ス者モアリ又加之明君ハ松ヲ愛シ樂

天ハ竹ヲ好ミ寧王ハ笛ヲ吹キ楚王ハ琴ヲ引如此人ノ」十五丁オ

心一シナナス侍ル者ナリ故二十二門ヲハ云申侍ル也

要集云 華嚴經入法界品云 譬如金剛

雖破不全 一切衆宝 猶不能及 菩提之心

亦復如是 雖少懈怠 声聞緣覺 諸功德宝

所不能及 要集云 引宝楼閣經偈云

菩提心功德 若有尽方分 周遍虚空界

無能客受者 入法界品上 譬如有人得信水

宝珠瑠璃其身入深水中而不没溺得菩提信心水

宝珠入生死海而不沈没

○第一二道心ヲ起シ出家シテ仏道ヲ可求ト申ハ慥ノ

往生ノ業因也大海ハ涓露ヨリ起リ須弥ハ微塵ヨリハ 十五丁ウ^②

以上、影印の一丁分（中卷十五丁オ・ウ）をそのまま翻刻した（ただし、異体字・旧字体は新字体に改めた）。傍線部①以前の箇所は十二門開示直後に続くいわゆる「十二尽くし」の後半部分である。最後の三行は十二門の第一「発道心シテ出家遁世シ」の冒頭部分である。

さて、問題となる「独自本文」であるが、傍線部①②③の部分となる。便宜的に引用経典ごと番号を付したが、「要集云」とあるように『往生要集』からの引用となっている。

引用の箇所は「大文第四、第三作願門、二利益」のくだりで、内容は「発菩提心の利益」に関するものとなっている。ちなみに『要集』の本文と数力所の異同が認められる。この点については後述する。

次に『要集』からの引用文（①②③）と『宝物集』本文の前後の脈絡であるが、緊密な文脈とはいえない。というのは、

引用文の前の部分は「十二門開示」と「十二尽くし」になっており、続く後の部分は十二門の第一で「道心を起こして出家」を勧める段となっていて、文脈としては寸断され孤立した感がある。ただ後に続く段中には「道心トハ菩提心ナリ」とあって、引用経文（①②③）の経意となっている「發菩提心の利益」という点では一部脈絡は認められるのである。さらに、三種の引用文の内、二種はこの段の本文中に書き下し文（ただし取意）で引用されているのである。したがって、漢文と書き下しの重複引用で、叙述展開上未整理・未配慮の感が否めず、草稿的な面を露呈したくだけりとなっている。小稿ではこうした性質を有する「片活三本」の「独自本文」が何故ここに記されたか。さらに、この「独自本文」の存在から諸本の成立上どのようなことが知られるか、について私見を述べてみたい。なお、二例目の独自歌の引用と検討は本考察の後に行うこととしたい。

三 「独自文①②③」と本文の関係

はじめに、「片活三本」の問題となる箇所を考察に必要な範囲で引用したい。また、後の考察で必要となる「第二種七卷本」の該当箇所も合わせて引用し、「独自文①②③」と本文の関係を明らかにしたい。

〈片活三本〉

又加之明君ハ松ヲ愛シ楽天ハ竹ヲ好ミ寧王ハ
笛ヲ吹キ楚王ハ琴ヲ引如此人ノ心一シナナラ
ス侍ル者ナリ故二十二門ヲハ云申侍ル也

〈第二種七卷本（吉川本）〉

かるがゆへに、十二の門をたてて申侍りつる也。いづれにても、心のひかんかたをつとめ給はば、皆仏道にいたる道なれば、とくほとけになり給ふべし。よくく信をいたしてつとめおこなひ給ふべし。

① 要集云 華嚴經入法界品云 譬如金剛
雖破不全 一切衆宝 猶不能及 菩提之心
亦復如是 雖少懈怠 声聞緣覺 諸功德宝
所不能及 要集云 引宝楼閣經偈云 菩
提心功德 若有尽方分 周遍虚空界 無能客
受者 入法界品上 譬如有人得信水宝珠璫璃
其身入深水中而不没溺得菩提心信水宝珠入生
死海而不沈没

○第一二道心ヲ起シ出家シテ仏道ヲ可求ト
申ハ慥ノ往生ノ業因也大海ハ涓露ヨリ起リ須
弥ハ微塵ヨリハシマル無上ノ位ニ登シ事又一
念ノ力ニヨルヘシ

道心トハ菩提心ナリ菩提心トハ大悲ナリ千
手陀羅尼經ニ大悲心是ト云ハ則是ナリ

万法ハ心作ニシテ心ノ外ニ別ノ法ナシ心仏
及衆生是三無差別ノ故ニ心ハ第一ノ怨ナリ心
ニ心ヲ許ス事ナカレ

心ハ野馬ノ如シ静メテ道心ヲ起セ神ヒハ猿
猴ニ似タリ名ケテ仏道ヲ求ヨ

煩惱ハ家ノ犬打トモ不去菩提ハ山ノカセキ
ツナケ共不留ヲ猪金山ヲスリ風求羅ヲマスカ
如ク好テ道心ヲ起スヘキ也

爰以南都東大寺禪林寺永觀律師ト云人非木
石ニ好ハ自ラ發心ストソ侍メル早ク道心ヲ起

(該當箇所なし)

第一に、道心をおこし、出家遁世して仏道をもとむべ
しと申は、たしかの往生の因なり。大海は涓露よりおこ
り、須弥は微塵よりはじまる。無上の位にのぼらん事、
一念の道心の力によるべし。

道心といふは、菩提心なり。菩提心と云は、大悲の心
なり。千手陀羅尼經に、大悲心といふ則これなり。

万法は心の所作にして、心の外に別に法なし。心仏及
衆生、差別なきが故に。心は是第一のあたなり。心に心
ゆるす事なかれ。

心は野馬のごとし、しずめて道心をおこせ。たましひ
は猿にたりに、なつてて仏道をもとめよ。

煩惱は家の犬、うてどもさる事なく、菩提は山の鹿、
つなげどもとまりがたし。猪、金山をすり、風、求羅を
ますがごとく、このみて道心をおこすべき也。

こゝをもつて、南都東大寺禪林の永觀律師は、「人木
石にあらず、このめばをのづから發心」と申たるなり。

テ速ニ名利ヲ可離ナリ

一念ノ菩提心ヲ起ハ百千ノ塔ヲ造ニモ勝タ
リ況ヤ永ク道心起シテ仏道ヲ求人ヲヤ

仏華嚴經ノ中ニ多ノ喩ヲ以テ菩提心ノ功德
ヲハ讃給テ侍リ

喩ハ善現藥王ノ一切ノ病ヲ滅ルガ如ク菩提
心モ一切ノ煩惱ノ病ヲ滅ス喩ハ牛馬羊ノ乳ノ
中ニ師子ノ乳ヲ入レハ煩惱ノ牛馬羊ノ乳ハ消
失ヌ

^A譬ハ信水宝珠ヲカサリテ水ニ入ハ人水ニヌ
レサルカ如シ菩提心ノ玉ヲ身ニカケヌレハ生
死ノ海ニ沈マサルカ如シ

譬ハ一切ノ宝ノ中ニ金如意珠勝タリ

^B譬ハ瞻蔔花波師花ヲ以テ千年衣ニシムト云
ヘトモ栴檀香ノ一日ニ不及如ク一切ノ功德ノ
中ニ菩提心モ又々如此

一念菩提心ヲ起ハ無上尊ト成慎テ疑ヲ成事
ナカレト説リ

出生菩提心經ニ八十万国土ヲ灰ニ成テ其国

はやく道心をこのみて、すみやかに名利をはなすべきな
り。

一念菩提心をおこす功德、百千の堂をつくるにすぐれ
たり。いはんや、ながく道心をおこして、仏道をもとめ
ん人をや。

仏、花嚴經の中に、おほくたとへをもて、菩提心の功
徳をばほめたまひて侍るめる。

「たとへば、善現藥王の、一切の病をめつするがごとく、
菩提心も一切の煩惱の病をめつす。たとへば、牛・馬・
羊の乳の中に、師子の乳をいれれば、みなきえうせぬ。菩
提心の師子の乳をいれるれば、煩惱の牛・馬・羊の乳、き
えうせぬ。

^Aたとへば、住水宝珠をかざりて水に在るれば、人、水
にぬるゝ事なし。菩提心の玉を身にかけつれば、生死の
海にしづむ事なし。

たとへば、一切の宝の中に、金、如意珠すぐれたり。
一切の功德の中には、菩提心の功德すぐれたり。たとへ
ば、一切の鳥の中には、伽陵頻の卵の中なる、なをしす
ぐれたり。たとへば、瞻蔔花・波戸迦花をもて、千年衣
にしむといふとも、栴檀香の一日におよばざらんがごと
く、一切の功德の中に、菩提心又かくのごとし。

一念菩提心をおこせば、無上尊となる。つゝ、しみてう
たがひをなす事なかれ」ととけり。

出生菩提心經には、「十方国土を灰となして、その国

ノ草木ト知十方世界ノ水ヲ海ニ入テ其河ノ水トハ知トモ菩提ノ功德ハ難量シ又若有人テ恒河沙ノ数ノ仏ヲ作テ須弥山ノ様ナル堂ヘ奉リタラン功德ハ菩提心ヲ起シタラン功德ノ十六分ニ不及ト云ヘリ

宝積經ニハ菩提心ノ功德水尽事アラマシカハ虚空ニ満テソアラマシトイヒ密藏經ニハ始ノ菩提能ク重クノ十惡ヲ除ク況ヤ第二第三第四ヲヤト教ヘ給リ出家功德經ニハ在家ハ無量ノ罪アリ出家ハ無量ノ功德ヲ得ト云リ

〔『片仮名古活字三卷本宝物集』中15オ〕
〔中17オ〕

の水草としり、十方世界の水を海にいれて、その河の水とはしるとも、菩提心は、はかりがたし。又、もし人ありて、恒河沙の仏をつくりて、須弥山のやうなる堂にすへたてまつりたらん功德、菩提心をおこしたらん功德の十六分におよばじ」といへり。

宝積經には、「菩提心の功德、もし色あらましかば、虚空に満なまし」といひ、秘密藏經には、「はじめの菩提心、よく重しの十惡をのぞく。いはんや、第二、第三、第四をや」とおしへ、出家功德經には、「在家はよく無量の罪あり、出家又無量の功德をうる」といへり。

〔『宝物集』新日本古典文学大系 岩波書店 一四八
一五一頁〕

以上、考察に必要となるくだりを二伝本から引用し、以後の検証に必要となる箇所は傍線を施してみた。さて次に、「片活三本」の「独自文」（傍線部①②③）と本文との関連を考察することになるが、その前に、「独自文」の出典となつた『往生要集』の本文と比較し異同を確認しておく必要がある。

片活三本

往生要集

①入法界品云 譬如金剛 雖破不全 一切衆宝
猶不能及 菩提之心 亦復如是 雖少懈怠 声聞縁
覺 諸功德宝 所不能及

①入法界品云 譬如金剛 雖破不全 一切衆宝
猶不能及 菩提之心 亦復如是 雖少懈怠 声聞縁
覺 諸功德宝 所不能及

②引**宝樓閣經**偈云 菩提心功德 若有**尽**方分 周遍
虚空界 無能**客**受者

②**宝積經**偈云 菩提心功德 若有**有色**方分 周遍虚空
界 無能**客**受者

③入法界品上 譬如有人得**信水宝珠瓔珞**其身入深水
中而不没溺得菩提心**信水宝珠**人生死海而不沈没

③入法界品云 譬如有人得**住水宝珠瓔珞**其身入深水
中而不没溺得菩提心**住水宝珠**人生死海而不沈没

(『片仮名古活字三卷本宝物集』中15才)

(『源信』日本思想大系 岩波書店 三五〇頁)

以上が「片活三本」の「独自文」(傍線部①②③)と『往生要集』との比較である。それぞれゴシックで示した箇所
所に異同が認められる。

さて、この「異同」を念頭に置きながら再度「片活三本」の本文に目を転じてみたい。まず独自文②であるが、本文のCと酷似していることが知られる。次に独自文③であるが、これは本文中のAとおおむね共通することが確認できる。そして、独自文①であるが、これは本文中に該当箇所がないことも知られる。

ここで、「第二種七卷本」の本文を参考にしながら、さらに考察をすすめると、次のようなことが明らかになる。一つは、独自文②の「宝樓閣經」であるが、「片活三本」の本文中と「第二種七卷本」には「宝積經」とあり、先述したように『往生要集』にも「宝積經」とあることから、『宝積經』が正しいことがわかる。そして独自文の「尽」は「色」の、「客」は「容」の草体誤写の可能性があること^③。二つめは、独自文①が本文中に見当たらないが、この独自文を『往生要集』で確認し、その数行前に目を転ずると、次のように記されていることが知られる。すなわち、

また入法界品に云く、(中略)譬へば、波利質多樹の花を一日衣に薰するに、瞻蔔の花、婆師の花の、千歳薰すといへども及ぶあたはざる所なるが如く、菩提心の花も亦またかくの如し。一日薰する所の功德の香は、十方の仏の所に徹り、声聞・縁覚の、無漏智を以てするもろの功德を薰すること、百千劫に於てするも及ぶあたはざる所なり。譬へば、金剛の、破れて全からずといへども、一切の衆宝の、なほ及ぶあたはざるが如く、菩提の心も

亦またかくの如し。少しく懈怠すといへども、声聞・縁覚のもろもろの功德の宝の、及ぶあたはざる所なり。⁴
とある。一読して明らかのように、「片活三本」の本文では独自文①（傍線部分）を採用せず、その直前にある経文（波線部分）を引用していることが確認できるのである。以上、「独自文①②③」と本文の関係を簡単に指摘した。

四 「片活三本」の草稿本的性格（その一）

次に、前段で確認した事実を踏まえると、そこからどのようなことが指摘できるかについてさらに考察をすすめた。
い。

まず、「独自文」①であるが、先述した通りこの経文は本文に引用されていない。代わりにその前にある「入法界品」の一節が引用されている。どちらも「菩提心の功德の大きき」を述べる経意となっているが、「片活三本」の作者は冒頭に引用した経文を本文中に記していないのである。理由はいくつか考えられるが、おそらくは、冒頭にメモとして『要集』から引用はして置いたものの、実際「十二門の第一、道心をおこし、出家遁世して仏道をもとむべし」の本文を書くに際して、『往生要集』に再度立ち戻ったとき、内容・文脈により適した経文が直前にあったので、急遽書き換えたのではないだろうか。独自文①にある「破れて全からずといへども」や「少しく懈怠すといへども」の表記は、「発菩提心」の譬喩としては負のイメージがある。それに対して「波利質多樹の花」は華やかで文脈に馴染むことは明らかであろう。

さてここで疑問が生じるのである。それは、冒頭に引用しているにも関わらず本文中に引用せず、しかも、書き換えや削除などもせず、そのまま載せている作者の執筆態度である。この引用経典はここにあってもほとんど作品に意味を持たず、削除した方が無理のない本文展開となっている。にもかかわらず、ここに記されているのは極めて不自

然である。

次の「独自文」②も同様である。まず、出典が誤りである。『往生要集』では先述したように『宝楼閣經』ではなく『宝積經』からの引用となっている。ところが、本文では「宝積經二ハ」として誤りを正した表記になっている。おそらくこれは、メモ執筆時と本文執筆時で生じた異同で、メモ時の誤りに気づかず本文では正確な出典名で執筆したと考えられる。もし気づいていたのであれば、メモの誤りも正されていたはずである。いずれにしても、出典を誤った独自文②の存在は明らかに不自然である。未整理・粗野といわざるをえない。さらに、作品完成に向けての筆者の配慮と余裕（推敲の跡）が読み取れるものとなっておらず、草稿的な筆使いが感じられるともいえる⁽⁵⁾。

ちなみに、後に「片活三本」本文中に引用される書き下し文（傍線部分C）が、冒頭の「独自文」②と似て非なるものとなっている点である。この辺の経緯についても簡単に説明しておきたい。すなわち「菩提心功德 若有尽方分 周遍虚空界 无能客受者」が「菩提心ノ功德水尽事アラマシカハ虚空ニ満テソアラマシ」となっているのであるが、おそらくこれは書写過程で生じた「草体誤写」が深く関わっていると考えられる。すなわち、祖本（あるいは翻刻前の本）には「菩提心功德 若有色方分 周遍虚空界 无能客受者」とあったはずで、それを書写者が「色」を「尽」に、「容」を「客」に誤読してしまったものと想像される。これについてはすでに指摘したところであった。さらに本文中においては、「菩提心功德 若有色方分 周遍虚空界」の箇所を取意で書き下した一文を誤読して「菩提心ノ功德水尽事アラマシカハ虚空ニ満テソアラマシ」と誤写してしまったものと推察される。これでは文意不通である。では「水尽事アラマシカハ」をどのように説明するのかということになるが、具体的には、「若有色方分」の「若」を「水」に、「色」を「尽」に、「方」を「事」に誤読したと考えるのである⁽⁶⁾。つまり祖本には「若色方アラマシカハ」とあったとあった可能性が高いのである。それは「第二種七卷本」が、「菩提心の功德、もし色あらましかば、虚空に満なまし」とあることからもおおよそ想像がつくのである。

次は「独自文」③である。この経文はすでに指摘したように、『往生要集』との数力所の異同が認められる。また、

本文中へ取り込んだ書き下し文は取意となっている。ただここで注意を要するのは、独自文と『往生要集』との異同事由である。もう一度異同箇所を示すと、①「上」と「云」、②「信」と「住」、③「瑠璃」と「瓔珞」となる。①と②は書写過程で生じた誤読・誤写の可能性が極めて高いので、考察から外すとしても、③は共通イメージによる記憶違いの可能性が高いことから、「片活三本」祖本の段階では記憶に基づいて書いていた可能性がここでも浮上してくるのである。先述した出典の誤り（独自文②の『宝楼閣経』）などもその可能性を裏付ける。やはり、独自文③においても草稿本的性格の片鱗が窺われるのではないだろうか。

五 「片活三本」の草稿本的性格（その二）

もう一点草稿本的性格が窺える箇所を指摘しておきたい。すでに引用済みであるが、問題点を明確にするため『往生要集』と比較する形で再度提示したい。

〈片活三本〉

A 喩ハ善現藥王ノ一切ノ病ヲ滅ルガ如ク菩提心モ一切ノ煩惱ノ病ヲ滅ス喩ハ牛馬羊ノ乳ノ中ニ師子ノ乳ヲ入レハ煩惱ノ牛馬羊ノ乳ハ消失ス

〈往生要集〉

①譬へば、善見藥王の、一切の病を滅するが如く、菩提心も一切衆生のもろもの煩惱の病を滅す。譬へば、牛・馬・羊の乳の、合して一器にあるに、師子の乳を以てかの器の中に投るるときは、余の乳は消え尽きて、直ちに過ぐるご碍なきが如く、如来てふ師子の、菩提心の乳を、無量劫に積む所のもろもの業・煩惱の

B 譬ハ信水宝珠ヲカサリテ水ニ入ハ人水ニヌレサルカ
如シ菩提心ノ玉ヲ身ニカケヌレハ生死ノ海ニ沈マサル
カ如シ

C 譬ハ一切ノ宝ノ中ニ金如意珠勝タリ

D (なし)

E 譬ハ瞻蔔花波師花ヲ以テ千年衣ニシムト云ヘトモ梅
檀香ノ一日ニ不及如ク一切ノ功德ノ中ニ菩提心モ又く
如此

『片仮名古活字三卷本宝物集』 中15オゝ 中17オ

乳の中に著けば、皆悉く消え尽きて、声聞・縁覚の法の中に住らざるなり。

(中略)

⑥譬へば、人ありて、住水宝珠を得て、その身に璽珞とすれば、深き水の中に入れども、しかも没み溺れざるが如く、菩提心の住水宝珠を得れば、生死の海に入りて沈没せざるなり。

(中略)

⑦譬へば、閻浮檀金の、如意宝を除いて一切の宝に勝れるが如く、菩提の心の閻浮檀金も亦またかくの如し。一切智を除いてもろもろの功德に勝れり。

⑧譬へば、迦楞毘伽鳥の、卵の中にある時すら大いなる勢力ありて、余の鳥の及ばざるが如く、菩薩摩訶薩も亦またかくの如し。生死の卵に於て、菩提心を発せる功德・勢力は、声聞・縁覚の及ぶあたはざる所なり。

⑨譬へば、波利質多樹の花を一日衣に薫するに、瞻蔔の花、婆師の花の、千歳薫ずといへども及ぶあたはざる所なるが如く、菩提心の花も亦またかくの如し。一日薫する所の功德の香は、十方の仏の所に徹り、声聞・縁覚の、無漏智を以てもろもろの功德を薫すること、百千劫に於てするも及ぶあたはざる所なり。

『往生要集』 岩波思想大系 岩波書店 一九三〇一九四頁

以上が注目したい箇所対比表である。それぞれ対応する箇所に記号を付したが、この中で特に着目したいのがCと◎の部分である。「片活三本」は『往生要集』『入法界品』の「喩」◎を「譬ハ一切ノ宝ノ中ニ金如意珠勝タリ」と記し、本文Eへと繋げている。その結果、「くノ如ク、……ノ如シ」の対応関係が成立せず、落ち着かない表現となっているばかりでなく、よくみると『往生要集』『入法界品』の取意ともなりえていないことが認められる。「第二種七卷本」はその不安定な表現に気づいたためか、Cの部分で『往生要集』の◎を踏まえて「たとへば、一切の宝の中に、金如意珠すぐれたり。一切の功德の中には、菩提心の功德すぐれたり」と書き加え、「くノ如ク、……ノ如シ」の対応表現こそ取らないものの、文脈のバランスを回復させている。「第二種七卷本」はさらに、『往生要集』の④の部分も踏まえて、「たとへば、一切の鳥の中には、伽陵頻の卵の中なる、なをしすぐれたり」を追加して、『往生要集』の本文構成に準じた増補をし、整った本文にしている。その結果、「第二種七卷本」は次のEの「瞻蔔花波師花」の本文と接続することで「花鳥」対比の表現効果も自然と加わり、豊かな表現内容になっていることが認められる⁽⁸⁾。

同様のことはAの箇所でも指摘できる。「片活三本」「往生要集」共に「たとへば」で始まる文が二つある。最初の「たとへば」の一文は小さな異同にこだわらなければ同文といって問題はなからう。ところが、二つ目の「たとへば」で始まる一文は両者に表現上大きな違いがある。文字数においても『往生要集』は「片活三本」の三倍近くなるが、「片活三本」はそれを「喩ハ牛馬羊ノ乳ノ中ニ師子ノ乳ヲ入レハ煩惱ノ牛馬羊ノ乳ハ消失ヌ」と意を取って三十文字で短くまとめている。その結果、対句形式の表現が崩れ、落ち着きの悪い文となっているのである。つまり、「牛馬羊の乳―師子の乳」と「煩惱の乳―菩提の乳」の対句が崩れているのである。粗野と言わざるをえない。以上の点も草稿本的な性格の表れといえよう。

六 「片活三本」の草稿本的性格（その三）

「片活三本」が有する草稿本の痕跡は、まだ指摘することができる。たとえば、巻三「愛別離苦」中の「夫婦の別れ」の段である。参考のため「第二種七巻本」も下段に引用する。

片活三本

同都ノ内ニハアレドモ、年来ノ夫妻ナンドモ離ヌレバ、遙ニ別レ行ク、同事ニテソ侍ル。是モ証歌ヲ申ベシ。小一条院、かれぐニ、成セ給ケレバ読給ケル。

堀河女御

○果ニケン年月何ヲ思ケン今シモ物ノナゲカシキカナ

大江公資ニ忘ラレテ読ル。

相模

○夕暮ハ待レシ物ヲ今ハ只行ラン方ヲ思ヒコソヤレ

（『宝物集』おうふう 七七頁）

第二種七巻本

おなじ都の内にはあれども、としごろのめをとこなどもはなれぬれば、はるかにわかれゆくに、おなじ事にてぞ侍るめる。これも証歌にて申べきなり。

小一条院、かれぐにならせ給ひにければ、よみ給ひける
堀河女御

○松風は色やみどりにふけつらん物おもふ人の身にぞしみる

おとこにわすられて、七月七日によみ侍りける

新左衛門

○わすれにし人にみせばや天の川いまれし星の心ながさを

白河女御越中

○待し夜のふけしをなにに嘆きけん思ひたえても過しける身を

大江公資にわすられてよみ侍りける

相模

○夕暮はまたれし物を今はたゞゆくらんかたを思ひこそやれ

おとこにわすられて、五月五日によみ侍りける

新少将

○長かれと契しものをあやめ草いかにたえぬるうきねなるらん

『宝物集』新日本古典文学大系 岩波書店 一一八

一一九頁

一読して明らかなように、「片活三本」は二首の証歌で、それに対して「第二種七巻本」は五首となっている。さらに両本では、堀河女御の詠草が異なっているのが認められよう。

さて、ここで注目されるのが、「片活三本」の「果ニケン年月何ヲ思ケン今シモ物ノナゲカシキカナ」の一首である。これは『宝物集』の諸本中の唯一の歌（独自歌）となっている（ただし、「二巻本」に「スキニケム」と初句のみ異なる一首が存在する⁹⁾）。この一首は「独自歌」ゆえに、「片活三本」と「第二種七巻本」の先後関係を語る上でも、基準となり議論しやすい一首といえる。

次に、両本の先後を論じるにあたって、必要な手順を踏まえておきたい。はじめに、堀河女御の詠草に関連する事柄を整理しておきたい。「片活三本」の「果ニケン年月何ヲ思ケン今シモ物ノナゲカシキカナ」の一首も、「第二種七巻本」の「松風は色やみどりにふけつらん物おもふ人の身にぞしみける」の一首も堀河女御の詠草で、『栄花物語』の巻十三「ゆふしで」と巻十四「あさみどり」の巻に載る歌で、いずれも歌意は、小一条院が訪れなくなったことへの嘆き（「愛別離苦」）の内容となっており文脈上問題はない。参考までに関連箇所を簡単に確認すると、

女御の御衣の袖のかたに、畳紙のやうなるものあるを、取りて御覽ずれば、「おぼしけることどもを書き給へる」と御覽ず、

過ぎにける年月なを思ひけん今しもものの歎かしきかな

うちとけて誰もまだ寝ぬ夢の世に人のつらさを見るぞ悲しき

千年経んほどをば知らず来ぬ人を待つはなほこそ久しかりけれ

恋しさもつらさも共に知らせつる人をば憂しといかが思はぬ

解くとだに見えずもあるかな冬の夜のかたしく袖に結ぶ氷の

など書かせ給へる。いみじうあはれに、「物を思はせ奉る事。などかは時時はここにも泊らざらむ。されど人のいみじうもてなしおぼいたる事の煩はしければ、いかでかは。今暫もありてこそは」などおぼすも、いとあはれなり。「結ぶ氷の」と書き給へるかたはらに書き給ふ、

逢ふ事のとどこほりつつ程ふればとくれど解くるけしきだになし

よろづにただ我御命知らぬ事をのみ、えもいはず聞え給ひて、出でさせ給ふに、宮達のたちさわぎ見送り奉らせ給ふに、御涙もこぼるれば、つい居させ給て、よろづに慰め奉らせ給て（以下略）

卷第十三「ゆふしで」

はかなく秋になりぬれば、風の音もあはれに心細きに、堀河の女御、松風の音を聞しめして、

松風は色や緑に吹きつらんもの思ふ人の身にぞしみける

と仰せられけり。⁽¹⁰⁾

卷第十四「あさみどり」

となる。前者の「ゆふしで」の巻の引用が長くなってしまったが、故あつての引用で、両巻に記される堀河女御の歎

きの浅深に着目したかったからである。すなわち、両者の文脈をたどると、前者「ゆふしで」の巻の「歎き」より、後者「あさみどり」の「歎き」の方が深いのである。あるいは、前者にはまだ「希望」（決定的な破局となっていない）が見いだせるが、後者には「絶望」に近いものが認められるのである。^①加えて、留意しなければならない点は、「片活三本」の初句「果二ケン」が『栄花物語』では、「過ぎにける」となっている点と、「第二種七巻本」の「松風ハ」の一首が、勅撰和歌集『後拾遺集』に入集した一首となっているという点である。

以上、考察に必要な注釈的手順を踏まえたので、次に私見を述べてみたい。問題は、「拔書説」「増補説」のいずれの観点に立つとしても、なにゆえ差し替えたのか、ということになる。はじめに「拔書説」の観点から検証してみたい。小泉弘氏は、詳細な伝本調査に基づき、「片仮名第二種七巻本」系からの抜き書きしたものが「片活三本」である、と論じられている。^②そうすると、「第二種七巻本」が有する「松風ハ」の一首を含む四首（相模の一首はそのまま）を削除して、「果二ケン」の一首を入れたということになる。この点については、以下の二点において疑問を呈せざるを得ない。一点目は、先述した堀河女御の「歎き」と「絶望」の深さという点に関わってくる。すなわち、『宝物集』の「愛別離苦」の章段の文脈にそつていうならば、希望が認められ深刻さが無い「果二ケン」よりも「松風ハ」の方が文脈にマッチするのである。したがって、「拔書説」の観点に立つと、「愛別離苦」の章段に適切な詠草から、その点においてはおよばない詠草に差し替えたことになる。二点目は、「第二種七巻本」の伝本が、「五首一括方式」の第一首目に、「勅撰和歌集」の歌を据えることが圧倒的に多い、という事実である。これは、第二種七巻本『宝物集』著者の例証歌配列方針と認められ、全体の八割に及んでいる。^③したがって、「拔書説」の観点に立つと、「片活三本」の著者が、「第二種七巻本」の著者の例証歌配列方針を無視して、わざわざ『栄華物語』に載る「過ぎにける」の歌に、しかも初句を「果二ケン」と誤つてまで差し替えたことになるのである。^④

次に「増補説」の観点から考察してみたい。「片活三本」は執筆時において手元にあった資料、あるいは、記憶に基いて「愛別離苦」の章段に合う「果二ケン」の一首をとりあえず便宜的に引用しておいたと考えられる。その後、

資料の蒐集が進み、「五首一括方式」とその第一首目に「勅撰和歌集」の歌を据えるという著者の例証歌配列方針にしたがって配列を考えたところ、『後拾遺和歌集』に載る「松風は」の詠草を目にするに及んで、詞書とその歌意が「愛別離告」の章段に適切な詠草で、しかも勅撰集入集歌であることを確認したので、「果二ケン」の一首を「松風ハ」に差し替えて、相模の詠草をそのまま残し、三首を加え五首にした、と推察するのである。

こうした推察を側面から補強してくれる伝本がある。それは『妙国寺本』で、同本についてはすでに山田昭全氏が翻刻し紹介している。卷三のみの零本であるが、この本を他の主要伝本と比較すると、「片活三本」と「第二種七卷本」の中間に位置する伝本、すなわち、「片活三本」を増補した伝本で、「第二種七卷本」の草稿本であることが知られるのである。この点についてはすでに詳細な報告をしているので、拙論にゆずるが、この考察結果も踏まえると、ますます「拔書説」の可能性は低くなるのである⁽¹⁵⁾。

以上、「拔書説」「増補説」の二つの観点から私見を述べたわけであるが、「拔書説」が極めて不自然で説得力に欠けるものであることが理解いただけたのではないだろうか。

したがって、この章段においても、先の結論と同じく、「片活三本」は「第二種七卷本」より先に位置する伝本、別言するならば「第二種七卷本」の草稿本とも言えるのではないだろうか。

七 おわりに

以上、独自文二用例の「ゆくえ」を追いながら、「片活三本」の草稿本的性格を指摘したわけであるが、最後にその要点をまとめておきたい。

まず、『往生要集』からの経文の引用の独自文であるが、この考察から次の三点がまとめられよう。

①引用された『往生要集』の経文三種は、後の本文と無関係ではないが、文脈としては連続せず孤立感があり、内容的にも後の段と重複している箇所がある。

②独自文は『往生要集』の引用經典名を誤って記しているし、「瓔珞」とあるべきところを「瑠璃」と誤っていることから、出典の確認を実施していない。また、引用した『華嚴經』の経文に対応する本文がないなど、誤りや矛盾などが明らかである。引用は記憶に基づいた備忘録的性格、あるいは暫定措置的性格が推認される。

③「片活三本」と「第二種七卷本」の本文を比較すると、明らかに「第二種七卷本」の本文が整っている。「第二種七卷本」は「片活三本」の備忘録的・暫定措置的（便宜的）な部分に手を入れながら増訂した伝本であるといえる。

また、独自歌「果ニケン」の考察からは、次の二点がまとめられよう。

①「片活三本」の独自歌は、堀河女御の詠草で、『栄花物語』の卷十三「ゆふしで」にのみ載る歌で、初句は「過ぎにける」である。しかし、「片活三本」の初句は「果ニケン」とあり異なる。ここにも前例と同じく出典確認の姿勢が認められず、記憶に基づいた暫定措置的性格が認められる。

②独自歌の内容と「第二種七卷本」の選歌意識を踏まえた上で、「抜書説」「増補説」の二つの観点から考察すると、「第二種七卷本」を抜き書きして「片活三本」が成立したとする説は、矛盾が多く極めて不自然で説得力に欠ける。

以上の諸点を総合すると、『往生要集』から引用された独自文と『栄花物語』から引用された独自歌は、備忘録的・暫定措置的性格を有する本文で、その誤りと矛盾から「第二種七卷本」への増訂の過程で発展的に解消された本文といえるのではないだろうか。したがって、「片活三本」は「第二種七卷本」の草稿的本文といえよう。

註

- (1)①木下資一「『宝物集』研究ノート——元禄七巻版本の諸本系統上の位置——」（『富山大学 国語教育』第一一
号 昭和六一年一月）

- ②大島薫『宝物集諸本の系統——元禄本について——』（『国文学』第六五号 関西大学 平成元年一月）
- ③山田昭全『『宝物集』元禄本の成立』（『宝物集の研究』山田昭全著作集 第二卷 第五章 おうふう 平成二七年一月）、『『宝物集』元禄本本文考——三卷本・平活本・七卷本の混合状態を探る——』（『宝物集の研究』山田昭全著作集 第二卷 第六章 おうふう 平成二七年一月）
- (2)黒田彰編『身延文庫蔵宝物集中巻』付片仮名古活字三卷本「片仮名古活字三卷本宝物集」影印（和泉書院 昭和五九年〇月）二七九～二八〇頁。
- (3)「尽」は「色」の草体と酷似し、「客」は「容」の草体と酷似する。また両者ともに運筆もおおむね重なる。「片活三本」には草体酷似による誤写が多くなりの数にのぼる。この二例も誤写とみてよいだろう。
- (4)『往生要集』巻上へ『源信』 日本思想大系6 岩波書店 昭和五三年二月 一〇六～一〇七頁。
- (5)「片活三本」の本文を読んでいくと、推敲を重ねていないのではないか、と思われる箇所に出くわす。大小いくつか指摘できるのであるが、たとえば、首尾の不照応が好例であろう。すなわち、冒頭で清涼寺の釈迦像に「南無大恩教主釈迦牟尼、無上大覺世尊、滅罪生善、臨終正念、往生極樂」と礼拝してはじまるのに対して、結びでは同じ釈迦像に「南無西方極樂化主弥陀如来、観音・勢至・二菩薩、南無九品蓮台清淨大海衆、必来迎引接シ給へ」と祈つて物語を閉じている。この例などはその最たるものであろう。この矛盾に気づいた「第二種七卷本」は、「南無大恩教主釈迦尊、後世をたすけたまへ」と結び、釈迦にはじまり釈迦で終わるという作品の首尾照応を回復させている。ちなみに、「片活三本」と「第二種七卷本」との混態本である「元禄本」もその矛盾に気づいたようで、「南無大恩教主釈迦尊。南無西方極樂化主弥陀如来。観音勢至・二菩薩。南無九品蓮台清淨大海衆。必ズ来迎引接シ給へ」と混合本文をもって首尾の対応を回復させている。こうした他本の首尾対応を確認する時、「片活三本」の首尾は作品の構成上バランスを欠いていることは明らかであろう。これも「片活三本」が有する草稿的性格が表れた一例といえよう。

(6)「若」と「水」、「色」と「尽」、「方」と「事」は、主要な「くずし字用例辞典」等で確認すると、著しくくずした草体になるほど字体が酷似し連筆もおおむね重なってくる。ちなみに、「片活三本」の意味不通の箇所多くは、草体酷似による誤写となっている。こうした例については、その主要なものを拙著『宝物集の研究』（おうふう 平成二二年）で多数紹介している。

(7)この二例も註(6)と同じく草体酷似から生じた誤写である。すなわち、「上」と「云」、「信」と「住」の草体を比較していただければ酷似していることが理解していただだけよう。

(8)『宝物集』では、論じてきたことをさらにわかりやすくするために、ものに譬えて語ることが多い。その中で、「花鳥」に譬えることが散見され、「片活三本」「第二種七卷本」の両本にそれは認められる。ただここで注意を要するのは、「片活三本」より「第二種七卷本」の方が徹底しているということである。「迦楞毘伽鳥」の例もその一つである。ついでもう一例を「臨終の悪念をとめて仏道になるべし」から紹介すると、「片活三本」で「加之柑子ノ木ヲ惜ミテ、本ニマキツキ、水瓶ヲ惜ミテ中ニ入テ蛇ト成ル人モ多ク聞ヘ侍ヌレバ」（おうふう 一七五頁）とあるくだりを、「第二種七卷本」では「されば、花をあひする人は胡蝶になり、鳥をあはれむものは畜生になるとなむ申たるなり」（新日本古典文学大系 三〇九頁）と書き換えて、「花鳥」に譬える方針を徹底させている。こうした細やかな書き換えは、もはや「片活三本」が「第二種七卷本」の抜書であるという捉え方では説明がつかないであろう。「花鳥」に譬える用例は他に二例ある。

(9)「一卷本」の愛別離苦の段に「スキニケムトシツキナニヲオモヒケムイマシモ、ノ、ナケカシキカナ」とあり、「片活三本」とは初句のみこととなる。「片活三本」が「果ニケン」とした理由は不明であるが、「一卷本」と「片活三本」が同じ詠草を有することは興味深い。ここでは論述の都合上便宜的に「片活三本」の独自歌として取り扱うことにする。

(10)松村博司『栄花物語全注釈三』日本古典評釈・全注釈叢書 角川書店 昭和五七年 四五〇～四五二頁・五一九頁。

(11) 堀河の女御の歎き・哀愁は、小一条院が道長の娘寛子と結婚してから年を経るにしたがつて深まっていた。その悲しみ有様は、『栄花物語』巻第十三「ゆうしで」、巻第十四「あさみどり」に詳しい。「ゆうしで」の巻によれば、小一条院の堀河第訪問の記事があることから堀河の女御の悲しみは深刻な中にもわずかな期待が認められるが、「あさみどり」の巻になると、小一条院はほとんど訪れていないことが推認される。「松風は」の一首はそんな状況で詠じられている。また、『後拾遺和歌集』はこの詠草を「同じ院高松の女御に住み移りたまひて、たえ／＼になり給ての頃、松風の心すごく吹き侍りけるを聞きて」との詞書を付して入集している。詞書の傍線部や季節が秋（＝飽き）であることなどを参考にすれば、堀河の女御の心境は絶望に近いものを感じる。「過ぎにける」より「松風は」の一首が「愛別離苦」の章段の文脈に適合しているとするゆえんである。

(12) 小泉氏は「片活本を、古態を存する『原寶物集』に近いものと見る人々が多いが、筆者は、今のところ、片活本を第二種七卷本系の祖本——就中、久遠寺本に近いもの——をもと本としてこれを抄略した第二種本よりは後に生じた省略本であると考えている」（『古鈔本寶物集 研究篇』角川書店 昭和四八年 一一四頁）と論じられている。

(13) 小泉氏の『古鈔本寶物集 研究篇』（角川書店 昭和四八年）の巻末に付載された『寶物集』諸本の所収和歌一覽」と「寶物集諸本間の所収和歌對照表」（二四一～三三二頁）を参考にして算出した。

(14) この点に、次のような事実も加えると、抜書説の可能性はますます遠のくであろう。すなわち、註(9)すでに触れた如く、「片活三本」の「果ニケン」の一首が「一卷本」の愛別離苦の段に「スキニケムトシツキナニヲオモヒケムイマシモ、ノ、ナケカシキカナ」とあり、「片活三本」とは初句のみ異なるものとなっている。「片活三本」が初句を「果ニケン」とした理由は不明である（記憶違い、あるいは誤写の可能性あり）が、「一卷本」と「片活三本」が基本的には同じ歌を引用している事実は、「一卷本」と「片活三本」の関係を語る上で極めて重要なことを示唆していることになろう。つまり、「片活三本」は「第二種七卷本」の抜書ではなく、「一卷本」を増広

したものであることが知られるのである。

- (15) 拙論「山田昭全先生の晩年の学問——『宝物集』成立論をめぐる——妙国寺本『宝物集』は第二種七巻本の草稿本である——」（『国文学踏査』第二八号 山田昭全名誉教授追悼号 大正大学国文学会 平成二十八年三月）